

プラテュス *πλατύς*



◆巻頭言 「災害と日常のあたりまえの生活の尊さ」 1
 保健科学研究所 結城美智子

◆新任教員紹介 2-5

就任のご挨拶	創成看護学分野	教授	田高 悦子
就任のご挨拶	健康科学分野	教授	池田 敦子
就任のご挨拶	医用生体理工学分野	助教	仲本 宗泰
就任のご挨拶	病態解析学分野	助教	陳 一凡
就任のご挨拶	基盤看護学分野	助教	宍戸 穂
就任のご挨拶	基盤看護学分野	助教	大橋 和貴
就任のご挨拶	データヘルスイノベーション分野	特任助教	山崎 尚二郎

◆協定締結・海外便り・国際交流の報告 6
 国立大学法人北海道大学大学院保健科学研究所と独立行政法人都市再生機構との
 健康な地域社会の構築に関する連携協定 結城 美智子

◆特集1 7
 第5回保健科学研究所国際シンポジウム報告
 The 5th FHS International Conference (FHS 2021):Look for the Silver Lining in the
 Post-Pandemic Health Sciences

◆特集2 8
 北海道大学大学院保健科学研究所ホームカミングデー報告
 公開講座委員会 委員長 矢野 理香

◆特集3 9
 北大フロンティア基金 学部等支援事業
 医学部保健学科多目的トイレ改修のためのご寄附のお願い

◆報告事項 9-14

災害と日常のあたりまえの生活の尊さ

保健科学研究院 結城美智子



3年前の9月に発生した北海道胆振東部地震では北海道全体に被害が及びました。人々の日常が取り戻せないほどの大きな影響は今もなお、続いています。

地震が多いとされる東北地方で生まれ育った私ですが、どのような災害に直面したのだろうかと自問します。古い記憶で強く印象に残っているのは1978年6月12日の夕方に発生した“宮城沖地震(マグニチュード7.4、震度5)”です。仙台市内の被害が大きく、この地震による被害はブロック塀倒壊によって痛ましい犠牲者が多く発生したことが特徴とされ、今も語り継がれています。ちょうど自宅に帰る時刻で大通りを歩いたところ、目の前の道路は波打ったようになり、歩行者は立っておられずしゃがみ込み、運転中の車は次々と急停止していました。停電したまま夜になり、当時は携帯電話もなく、家族や友人に連絡するだけでも困難でした。ライフラインもすぐに停止し、電気は最も早く回復しましたが、ガスと水道の復旧はかなり時間を要しているにもかかわらず、大学の授業はすぐに再開したことを覚えています。困難な日常生活と学生生活を送りながら、級友たちと2つの話題が中心になりました。ひとつは、看護の教員が「皆さん、やかんのお湯ひとつあれば身体を清潔にすることができます・・・」と災害時や非常時における看護技術の活用とさまざまな工夫を教えてくださいました。4月に入学したばかりで、看護を学び始めたときの新鮮な経験です。このようなケアは自身のためでもあり、他者へのケア提供となることが素直に実感できたのでした。もう一つの話は、また同じような大きな地震が来たら、何を持ち出して避難するか。現代の学生であれば何と答えるのでしょうか。当時の私たちはほぼ皆同じ答え―“病理学の教科書!”―でした。当時の病理学の教授がお聞きになったら喜んでく

ださると思いますが、私たちは病理学が好きなでもなく、特別な科目でもないのです。それは、当時の学生としての持ち物(財産?)で最も高価なものだったからなのです。学食のカレーライスが100円であった時代に病理学の教科書は1冊14000円と高額で、しかもセットになっている2冊持参で通学していたのでした。40年以上も過ぎた今も本棚の片隅で処分できない当時の書籍等とともに鎮座しています。

もう一つの大規模災害の経験は2011年3月11日に発生した東日本大震災・福島原子力発電所事故の被災です。この時は私自身が福島に所在する大学の教員として学生への対応もありました。詳細は別の機会といたしますが、学生は身近な人の死や避難所からの通学など、皆多くの苦難を強いられました。授業再開となった5月連休明けの最初の授業を忘れることはありません。いつもならばにぎやか過ぎるほどなのに私語や雑音がまったくなく、これまでに経験したことのない静かで張り詰めた空気のなかにも全員が無事で同じ空間、同じ時間を共有できていることをかみしめているようでした。被災から数日間の経験として、次のようなことを語ってくれた学生もいました。「運動部の遠征先の体育館にいたら天井が崩れて下敷きとなり、死んでしまうのかと思った」「背後から津波が押し寄せてくる道を必死に走って逃げた」「倒壊する自宅にいて一瞬に祖母を外に連れ出した」「ライフラインが止まっているなかでコンビニ、スーパーに行っても水、食料品はすでになく、やっと手に入れた1本のサイダーでご飯を炊いた」など、壮絶な体験の一部です。日常のあたりまえの生活がどれほど尊いか、心に染み入ります。

昨年来のCOVID-19のパンデミックも人々の日常を停止させ、生活と健康への影響が続いています。災害は発生しないことが何よりですが、日本では災害は必ず起こります。北海道でも例外ではありません。北海道の地域特性として積雪寒冷時の避難などは重要な課題として共有されています。

災害が起こっても命を守り、減災のための準備と対応を自分ごととして取組むことが必要だと思います。

就任のご挨拶

創成看護学分野(地域看護学/公衆衛生看護学) 教授 田高 悦子



この度、2021(令和3)年4月1日付にて創成看護学分野(地域看護学/公衆衛生看護学)教授に就任させていただきました。悠久の歴史と伝統を有した北海道大学の重責を賜りましたことに心から感謝申し上げます。

私は、東京大学医学部保健学科(現健康総合科学科)卒業後、厚生技官等を経て、東京大学大学院医学系研究科地域看護学分野修士課程・同博士課程を修了し、東京大学大学院講師、横浜市立大学大学院教授を経て赴任いたしました。自分の来し方を振り返ると、私は、高校卒業後の進路については若干の迷いがあったものの、医師であった父が24時間365日、自らの手に託された人々のために身を捧げる姿に触れる中で、自ずと看護の道に関心を抱くようになったのがいきさつかもしれません。

日本の看護学系の課程を有する大学は、2021年、290校ありますが、周知のとおり、はじめて設置されたのは1952年の高知女子大学であり、続いて1953年の東京大学です。その後の動きは遅々とし、1990年代初頭までは10大学程度でした。私が看護学(保健学)を学んだのはその10大学程度の時代です。若かりし当時の自分には、学問としての看護学(保健学)は医学と比較し発展途上にあるように思われましたが、次第に、おおよそあらゆる学問が対象も方法も絶えず広げながら発展していることを感じるようになり、看護学/保健

学という学問を職業とすることへの芽が生まれたと思います。

地域看護学/公衆衛生看護学を自らの専門分野に決定付けたのは、東京大学で金川克子初代地域看護学教授に師事したことでした。金川教授には、看護学がまだ専門分化されていなかった時代に、地域/社会を対象とする地域看護学/公衆衛生看護学の学問的確立を目指され、そのアカデミア拠点として教室の内ではどこか家族的な雰囲気の中で、教室運営、研究指導、人としてのありようについて、また教室の外では、金川教授が初代理事長を務めた日本地域看護学会の発足や諸外国のCommunity/Public Health Nursing Councilとのネットワーク等々について、体験的に学ぶ機会を授けていただきました。

公衆衛生看護学/地域看護学の社会的意義は、地域/社会の健康課題を明らかにし、解決策を見出すところにあります。私の使命は、これまでの取り組みをふまえ、地域/社会の健康課題を抜き出すためのツールや方法論(地域診断法)の開発、健康課題を予防/解決するための理論や技術の開発に関する研究を推進し、社会に貢献することであると存じます。また同時に、北大が建学150年の目標に掲げる「世界の課題を解決する」ための地域看護学/公衆衛生看護学のアカデミア拠点を北大に形成し、いずれ北大を、そしてこの社会を支えることができる人材を育てることであると存じます。

微力ではございますが、皆様からのご指導を賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。



就任のご挨拶

健康科学分野 教授 池田 敦子



このたび、前任である齋藤健先生の定年退職に伴い、令和3年4月1日付で健康科学分野教授として着任いたしました。

私は、東京理科大学基礎工学部を卒業後、製薬会社研究所にて勤務したのち、2006年に北海道大学大学院医学研究科修士課程に入学いたしました。大学院ではヒトを対象とした研究がしたいと思い、公衆衛生学分野で環境疫学研究を開始しました。大学院時代の研究テーマは室内環境による居住者の健康で、世界でも報告事例が少なかった微生物由来の揮発性有機化合物の室内濃度を測定し、シックハウス症候群やアレルギーとの量-影響関係のリスク評価を実施しました。さらに、ハウスダスト中の準揮発性有機化合物フタル酸エステル類やリン系難燃剤濃度が高いことが、アレルギーのリスクを上げることが示されました。

学位を取得した2011年から、北海道大学環境健康科学研究教育センターにて10年間教員を務めました。主に出生コーホート「環境と子どもの健康に関する北海道スタディ」に参画し、胎児期の有機フッ素化合物、塩素系農薬、ダイオキシン類、フタル酸エステル類等の環境化学物質曝露と子どもの健康に関するリスク評価を実施してきました。特に子どものアレルギーや、性腺機能に着目し、胎児期の化合物曝露が児のアレルギーのリスクを下げる一方、感染症罹患リスクを上げ、免疫毒性影響がある可能性、男児の出生時ステロイドホルモンや性ホルモンが上がる、または下がるといった関

連を報告し、動物実験で報告されてきた内分泌かく乱作用が、ヒトへの比較的低濃度曝露でも生じる可能性を示しました。同時に、2011年に開始した環境省「子どもの環境と健康に関する全国調査(通称:エコチル調査)」の北海道ユニットセンター事務局として、妊婦さんのリクルート開始準備時から研究に従事してきました。また、2014年に環境健康科学研究教育センターはWHO Collaborating Centre (WHOCC) for Environmental Health and Prevention of Chemical Hazardsに認証されました。アジアのデータに特化した化学物質に関するリーフレットの作成や、WHO資料の改定や和訳も行い、地域の医療従事者が活用できるような取り組みもしております。

今後、学部教育では、健康科学や環境保健学等により環境と健康への関心を高め、疾病の背景にある(環境)要因を想定し、その症状発症の予防に結び付けられるような、実践的なリーダーを育てていきたいと思っております。大学院では保健学科のみならず、多様なバックグラウンドを持つ学生の専門性を生かし、健康科学、環境疫学研究を推進する人材育成をしていきたいと考えております。さらに、新型コロナウイルスの感染拡大で延期をしておりますが、ベトナムで電気廃棄物の健康調査など、国際共同研究も活性化させたいと考えております。北海道大学は、持続可能な開発目標SDGs (Sustainable Development Goals)の実践研究において、国内のリーダー的大学です。環境と健康領域を核にSDGsの達成に貢献できる研究・教育に、微力ではございますが取り組んでまいります。ご指導ならびにご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

就任のご挨拶

医用生体理工学分野 助教 仲本 宗泰



令和3年3月1日付で北海道大学大学院保健科学研究院医用生体理工学分野の助教に着任致しました。私は群馬県出身で高校生の頃、地元から遠く離れた大学の進学を希望していました。北海道大学か九州大学で悩んだ結果、九州大学に進学致しましたが今回ご縁があり北海道大学で教員として研究・教育活動に従事できること非常に嬉しく存じます。

私は平成29年に九州大学にて博士(保健学)を取得後、東大病院でポスドクとして研究に従事してありまし

た。

私の研究テーマはRadiomics(レディオミクス)に基づく放射線診断・治療支援システムの開発です。医用画像から抽出されるイメージングバイオマーカーと病期や予後などの相関について網羅的に解析を進めております。

本研究院での研究活動を通して本邦の学術研究を牽引すると共に高度化する医療に柔軟に対応できる医療従事者の育成に努めて参りたいと考えております。今後ともご指導・ご鞭撻賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

就任のご挨拶

病態解析学分野 助教 陳 一凡



令和3年3月1日付で、北海道大学大学院保健科学研究院病態解析学分野に助教として着任いたしました。

私は中国北京出身で、中国の大学を卒業後、北海道大学大学院情報科学研究院に進学し、情報科学を勉強しました。そこで血液中のビタミンDや脂質に関する統計学的解析の研究を本研究院と医学研究院と共同で行い、令和2年6月に博士(情報

科学)の学位を取得しました。令和2年7月から令和3年2月までの8ヶ月間は、恵研究室の博士研究員として脂質の情報科学的研究に従事しました。

この度は北大保健科学研究院で教育・研究に携わる機会を頂き、大変光栄に思っております。今後は質量分析装置で得られる膨大な脂質データを材料に、新たな情報解析の方法を開拓したいと考えております。教育の面では、微力ながらも学生が脂質や情報科学に興味を持てるよう努力してまいります。どうぞご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



新任教員紹介

就任のご挨拶

基盤看護学分野 助教 穴戸 穂



令和3年4月1日付で、北海道大学大学院保健科学研究院基盤看護学分野の助教に着任いたしました。私は、本学看護学専攻を7期生として卒業した後、本学院の修士課程に進学し、札幌市内の病院で看護師として勤務後、博士課程を修了しました。

これまで、研究テーマを「安全で気持ちよさを提供できる看護技術に関する研究」とし、機器を用いて皮膚温

や自律神経活動、皮膚状態などの生理的反応を評価や、患者さんの発言などの心理的反応を測定した研究に取り組んできました。今後も、臨床現場に還元できる研究に励みたいと考えております。

教員としての経験はとても未熟ではありますが、看護の楽しさ・素晴らしさを学生と一緒に学び、伝えていきたいと考えております。自分が組織の一員としてできることは何か、研究室や保健科学研究院の発展に貢献できるよう日々努力して参りますので、どうぞよろしくお願い致します。

新任教員紹介

就任のご挨拶

基盤看護学分野 助教 大橋 和貴



令和3年10月1日付で、北海道大学大学院保健科学研究院基盤看護学分野に助教として着任いたしました。この度、本院で教育・研究に携わる機会をいただき、大変に嬉しく思っております。

私は、新潟大学医学部保健学科看護学専攻を卒業後、看護師として9年間、手術室や病棟で勤務していました。その間、新潟大学大学院保健学研究科(修士課程)を修了しました。また、

2019年から札幌保健医療大学にて成人看護領域の助教として教育・研究に携わってまいりました。これまでの研究内容は、肝疾患患者とサルコペニア・フレイルの関連についてです。サルコペニア・フレイルの予防には医療と地域のつながりが重要です。今後は、これまでの経験をもとに地域・在宅医療にも視野を広げ、研究を行ってまいります。

至らない点も多くございますが、保健科学研究院の発展に貢献できるよう尽力いたします。今後ともご指導とご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

新任教員紹介

就任のご挨拶

データヘルスイノベーション分野 特任助教 山崎尚二郎



令和3年4月1日付で北海道大学大学院保健科学研究院データヘルスイノベーション分野の特任助教に着任いたしました。

私は本学医学部保健学科看護学専攻を卒業後、そのまま本学保健科学院修士課程、博士後期課程へと進学し、出生前後の栄養環境が成長後の生活習慣病に及ぼす影響に関する研究で学位を取得いたしました。現在は生活習慣病を含む疾病予

防・健康増進を目的とした自治体の保健事業におけるデータ活用の推進をテーマに、凸版印刷株式会社の寄付講座にて調査・研究及びソリューションの開発に取り組んでおります。

この度はご縁があり、長く学生生活を過ごしたこのキャンパスで、お世話になった方々と活動する機会をいただけたことを大変光栄に感じております。新たな環境、新たなフィールドということもあり、至らない点が多々ございますが、今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い致します。

国立大学法人北海道大学大学院保健科学研究院と 独立行政法人都市再生機構との健康な地域社会の構築に関する連携協定

結城美智子

保健科学研究院と独立行政法人都市再生機構は、道内のUR賃貸住宅を拠点として、高齢者をはじめ多世代の人々が互いに支え合い、いつまでも安心して生き生きと住み続けられる住まい・まちづくりを進めていくにあたり、UR賃貸住宅を高齢者の健康の維持増進や住民福祉の向上等に係る研究実践の場として活用し、保健科学研究院の高度な知見と実践的介入による健康づくりを展開していくことで、地域高齢者の健康寿命延伸などにつなげていきたいと考え、2021年7月8日に連携協定を締結致しました。

連携内容は、高齢者を中心とした幅広い世代に対応した健康の維持増進や住民福祉の向上、健康維持増進活動などを通じた多世代コミュニティづくり、地域の課題に対応した取り組みに対する専門的な技術支援と情報交換、地域の保健医療を支える人材育成などです。

今後の具体的活動は『ほくだい健康プログラム』として下記の実践研究を展開していきます。

1)健康調査・健康相談会等

すでに4月から札幌市内の大規模集合住宅のUR団地にお住いの高齢者を対象に、健康と生活に関する調査および健康相談会を実施し、その結果から住民の皆

様、関係機関の皆様とともに健康づくりに向けた取り組みをすすめております。特に今回の調査は、コロナ禍での実態を示した貴重な結果であり、感染予防のための行動自粛や行動様式の変化が健康状態と関連しており、介護予防のための介入の必要性が示されました。今後も定期的実施する予定です。

2)認知機能の評価・介入プログラムの研究開発

認知症の早期発見および認知症の予防的介入方法の開発、共生が可能な地域コミュニティと認知症のリハビリテーションに精通する専門職が予防的介入・ケアに積極的に参画できる環境構築を目指した研究をすすめる予定となっております。

北海道は、少子高齢化問題の「課題先進地域」で、北海道の人口減少率は全国2位、都市部への人口の一極集中が進むことで、地方の過疎化が深刻な問題となっています。ICT・IoT等の先端技術を活用することで、健康寿命の延伸、認知症の早期発見・予防的介入、共生が可能な地域コミュニティを北海道において実現することができれば、国内他地域でも展開可能なモデルケースとなることが期待されます。



健康調査の実施風景



第5回保健科学研究院国際シンポジウム報告 The 5th FHS International Conference (FHS 2021): Look for the Silver Lining in the Post-Pandemic Health Sciences

国際交流専門部会長 山内 太郎

9月17日(金)～18日(土)の2日間、保健科学研究院において第5回国際シンポジウム(The 5th FHS International Conference, FHS 2021)を開催しました。

保健科学研究院(Faculty of Health Sciences, FHS)が主催する国際シンポジウムは2013年から隔年開催しており、第5回目を迎え、今回は新型コロナウイルス感染拡大の影響により初のオンライン開催となり、約250名にご参加いただきました。

今回は、協定校の香港大学からDr. Polly Wai-Chi Li, 台北医学大学からDr. Yung-Feng Lin, チュラロンコン大学からDr. Anussara Prayonggratを招待した他、国立成功大学(台湾)からDr. Cheng-Feng Lin, 中南湘雅二医院(中国)からDr. Qian Liu, タンロン大学(ベトナム)からDr. Hien Thi Thu Ngoをお招きし、さらに、保健科学研究院から吉田倫子講師、長谷川直哉助教、吉村高明助教、Sikopo Nyambe学術研究員の計10名が講演を行いました。看護学、臨床検査学、放射線医学、理学・作業療法学、国際保健学、健康科学といった広範な保健医療分野をカバーするシンポジウムになりました。

講演に加えて、第2回国際シンポジウム(FHS 2015)から恒例となっている、大学院生による一人1分間の口頭ポスター紹介「ショットガン・プレゼンター

ション」は事前に撮影した動画をZoom内で視聴し、続いて、85題のポスター発表に関する質疑応答がオンラインビジネスツールであるSlack上で2日間に分けて行われました。

招待講演やポスターセッションはいずれもオンライン上でのやりとりでしたが、大学院生は懸命に英語で自らの研究に対する質問やコメントに回答し、活発なやりとりが行われました。新型コロナウイルスの感染拡大が収束しない中、大学院生が海外に渡航して国際学会に参加する機会は限られていることから、本国際シンポジウムは大学院生にとって大変貴重な機会です。この経験を今後の研究活動に活かしてもらいたいと期待しています。

また、ポスターを発表した大学院生に贈られる「Best Poster Award」については、Shan Yunさん(保健科学コースD3)、Yi Zengさん(保健科学コースD1)、上田龍一郎さん(保健科学コースM2)の3名が受賞しました。

最後に、本シンポジウムの開催にあたり、海外からの招待講演者の皆様、座長及び発表を引き受けていただいた保健科学研究院の教員の方々、当日の運営及び準備等にご尽力いただいた国際交流専門部会員及び事務の方々、保健科学研究院長をはじめ参加いただいた教員、大学院生、学部生の皆様に感謝申し上げます。



伊達研究院長のご挨拶



オンラインによる参加者の集合写真



Best Poster Award 授賞式

北海道大学大学院保健科学研究院 ホームカミングデー報告

公開講座委員会 委員長 矢野 理香

今年の北海道大学大学院保健科学研究院ホームカミングデーは令和3年9月25日(土)に医学部保健学科・保健科学院・保健科学研究院において開催されました。昨年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止となりましたが、今年度はZoomによるオンライン配信にて開催することができました。はじめてのオンライン開催でしたが、総勢60名の方々にご参加頂き、例年よりも多くの皆さまに講演会などをご視聴いただくことができました。多くの卒業生の皆様にご参加いただきましたことに、心から感謝申し上げます。

各分野紹介と卒業生による講演会という2つのプログラムで構成されました。伊達広行研究院長からの開催のご挨拶に始まり、分野紹介では、各分野(基盤看護学分野、創成看護学分野、医用生体理工学分野、病態解析学分野、リハビリテーション科学分野、健康科学分野)から最近の教育および研究活動と教員紹介などがオンデマンド方式でご紹介しました。

講演会では2名の卒業生を講師としてお招きし、これまでの歩みや現在の活動状況などをお話いただきました。最初に、藤澤真一氏(北海道大学病院 検査・輸血部 副臨床検査技師長)に、「常識にとらわれるな!〜だ液検査へのチャレンジ〜」と題し、新型コロナウイルス感染症診断のためのPCR検査の材料は鼻や喉から採取するものという常識にとらわれず、より安全で簡便に採取できるだ液を材料とすることにチャレンジしたき

かけから、検査体制の確立、そして、現在では入院患者さん全員に対してだ液PCR検査を実施し、患者さんが安心して医療を受けられる体制を整えるに至った経緯を大変わかりやすく講演いただきました。

続いて、潟端純也氏(日本メディカルICT学会 代表理事/北海道大学病院 医療技術部 放射線部門)に、「仕事と研究が嫌いな放射線技師が学会を設立しちゃった話」と題し、放射線技師として活動する傍ら、2020年に設立した日本メディカルICT学会や、診療放射線技師の情報交換オンラインコミュニティ「ラジエーションサロン」の立ち上げなど、SNS等を駆使したオンラインコミュニティで医療従事者の技術を向上させ、患者の利益につながる新しい未来をつくることを目指すという斬新な切り口で講演いただきました。

最後に、北海道大学医学部保健学科・医療技術短期大学部同窓会総会が行われました。世代を超えての交流が深まり、なごやかな歓談のひと時を過ごしました。初めてのオンライン開催でしたが、講演会では参加者からの質問を受け付け、リアルタイムで回答するなど、盛況の内に終えることができました。来年もみなさまに参加したいと思っただけのホームカミングデーを目指して準備を進めてまいります。ご要望などがございましたら、ぜひご連絡いただければと思います。来年も、多くの皆様のご参加をお待ちしております。



矢野公開講座委員会委員長のご挨拶



藤澤真一氏と潟端純也氏による講演の様子



オンラインによる参加者の集合写真

北大フロンティア基金 学部等支援事業 医学部保健学科多目的トイレ改修のためのご寄附のお願い

北海道大学では、2006(平成18)年に大学の自主性・自立性をこれまで以上に発揮するため、「北大フロンティア基金」を創設しています。現在、保健学科および保健科学院には多くの学生が在籍し、オープンキャンパス、研究参加などでは多くの方々に来学していただいております。その中には、車椅子を使用している方、乳幼児をお連れの方、高齢の方なども多くいらっしゃいます。しかし、本学の1階に唯一ある多目的トイレが大変使いづらく、ご不便をおかけしている状況です。「車いすではドアが重くて開けられない」「玄関からのスロープが車いすであがるのに大変苦労する」など保健学科の設備であるにもかかわらず、大変不便な状況です。そこで、北海道大学広報課卒業生・基金担当のご協力を得て、「北大フロンティア基金」の学部等支援事業として多目的トイレ改修のご寄附のお願いプロジェクトを立ち上げました。

多目的トイレ(玄関スロープ改修含む)の改築には多額の費用(募金目標3,000,000円)を要します。もし改修ができましたら、秋の銀

杏並木の観覧など折々に触れて、多くの市民の皆様にも本学科の多目的トイレをご活用いただけたらと思っております。多くの皆様が安全で気持ちよく多目的トイレを活用いただけるように、皆様にご支援を賜りますよう、ご理解とご協力をお願い致します。

詳しくは北大フロンティア基金ホームページをご覧ください。

<https://www.hokudai.ac.jp/fund/projects/detail.html#fund01>



車いすではドアの取っ手が高く、重く開けることができない。鍵もできない



水を流す操作パネルが見えない

写真：現在の多目的トイレの状況

報告事項

令和3年度(第15回)北海道大学医学部保健学科長賞表彰式を挙

令和3年10月29日(金)、本研究院会議室において「北海道大学医学部保健学科長賞」表彰式が行われ、保健学科の教員が列席のもと、伊達保健学科長から被表彰者5名に、賞状及び記念品が贈呈されました。

この表彰は、医学部保健学科4年次に在籍する学生で、特に優秀な成績を修め、他の学生の模範となると認められた方へ授与されるものです。

このたび下記の方々が表彰を受けられました。

専 攻	氏 名
看護学専攻	田 中 実 緒
放射線技術科学専攻	堀 間 雄 登
検査技術科学専攻	西 川 楓
理学療法学専攻	野 村 真 希
作業療法学専攻	太 田 甲 子 郎



保健科学研究院研究助成制度対象者(令和3年3月~令和3年10月)

所属分野	職名	氏名	備考
基盤看護学分野	教授	矢野理香	2編
基盤看護学分野	准教授	鷲見尚己	
創成看護学分野	教授	佐藤洋子	2編
創成看護学分野	教授	蝦名康彦	*1
創成看護学分野	教授	田高悦子	
創成看護学分野	准教授	平野美千代	3編 内1編10%以内*1
医用生体理工学分野	特任教授	山本徹	
医用生体理工学分野	教授	石川正純	3編
医用生体理工学分野	准教授	杉森博行	2編
医用生体理工学分野	助教	堤香織	2編
病態解析学分野	教授	山口博之	2編
病態解析学分野	教授	恵淑萍	4編 内1編20%以内*2
病態解析学分野	教授	石津明洋	2編
病態解析学分野	准教授	政氏伸夫	
病態解析学分野	講師	岡田一範	
病態解析学分野	助教	陳一凡	内1編20%以内*2
リハビリテーション科学分野	教授	浅賀忠義	
リハビリテーション科学分野	教授	遠山晴一	内1編20%以内*2
リハビリテーション科学分野	教授	前島洋	3編
リハビリテーション科学分野	准教授	寒川美奈	2編
リハビリテーション科学分野	准教授	宮崎太輔	内1編10%以内*1
リハビリテーション科学分野	講師	澤村大輔	
リハビリテーション科学分野	講師	高島理沙	
リハビリテーション科学分野	助教	笠原敏史	2編
リハビリテーション科学分野	助教	石田知也	3編 内1編20%以内*2
リハビリテーション科学分野	助教	高松泰行	3編
リハビリテーション科学分野	助教	長谷川直哉	3編
リハビリテーション科学分野	助教	岡田宏基	
健康科学分野	教授	小笠原克彦	3編 内2編20%以内*2
健康科学分野	教授	山内太郎	
健康科学分野	講師	陳震	内1編20%以内*2
健康科学分野	講師	SIDDABASAVE GOWDA B. GOWDA	5編 内2編10%以内*1, 内2編20%以内*2
健康科学分野	助教	吉村高明	2編
健康科学分野	助教	Divyavani	内1編20%以内*2
研究院長付(健康科学分野)	助教	WU YUE	内1編10%以内*1
保健医療教育研究センター	特任助教	青木智大	内1編20%以内*2

【研究助成制度】

対象:(1) 英文原著論文(査読有, IF有, first author)を執筆した教員

(2) 英文原著論文(査読有, IF有)のcorresponding authorとなった教員

(ただし, (1)に該当する論文のcorresponding authorとなった教員は除く)

助成の方法:論文1編につき10万円の研究費を対象教員に配分

*1 掲載雑誌のランキングが当該カテゴリーにおいて上位10%以内は20万円を追加配分

*2 掲載雑誌のランキングが当該カテゴリーにおいて上位20%以内は10万円を追加配分

令和3年度科学研究費(文部科学省・日本学術振興会)採択一覧

研究種目	新規/継続	氏名	分野・職名	研究課題
基盤研究(A)	継続	田高 悦子	創成看護学分野教授	独居高齢者の社会的孤立予防に向けた民産官学共創GPモデルの構築と社会実装研究
	新規	池田 敦子	健康科学分野教授	環境化学物質曝露による有害作用:ヒト疫学研究と動物実験による機序解明
基盤研究(B)	新規	山口 博之	病態解析学分野教授	癌細胞との類似性から紐解く性器クラミジアの細胞内適応機構解明研究の新展開
	新規	石津 明洋	病態解析学分野教授	MPO-ANCA関連血管炎発症機序の全貌解明と新規治療法の開発を目指して
	新規	尾崎 倫孝	基盤看護学分野教授	異なる特性をもつ二種類の光を利用した生体内深部組織の修復・再生法の開発
	新規	千見寺 貴子	リハビリテーション科学分野教授	老化細胞ニッチを標的とした関節リウマチの制御と関節再生戦略の創成
	継続	前島 洋	リハビリテーション科学分野教授	薬理的神経制御を用いた新たな脳卒中運動療法の開発に対する生体脳イメージングの応用
	継続	横澤 宏一	健康科学分野教授	コミュニケーションの神経基盤—脳磁場ハイパースキャンニングによる脳間相関の描出
	継続	石川 正純	医用生体理工学分野教授	加速器BNCT治療における総合的線量評価システムの開発
	継続	山内 太郎	健康科学分野教授	子どもと地域と研究者が共創するサニテーションプロジェクト
	継続	平野 美千代	創成看護学分野准教授	フレイル予防のためのICTを活用した地域まるごと社会活動プログラムの開発
基盤研究(C)	新規	杉森 博行	医用生体理工学分野准教授	脳虚血性病変におけるAIとRadiomics解析を融合した予後予測方法の開発
	新規	神島 保	医用生体理工学分野教授	関節リウマチ破壊性変化定量解析システムの妥当性評価
	新規	菊地 実	客員研究員	AI技術によるインスリン自己注射管理指導のためのエコーシステムの開発
	新規	鏡山 浩美	創成看護学分野助教	16時間夜勤を行う看護師の睡眠構造の特徴と疲労および健康関連QOLとの関連
	新規	岩本 幹子	基盤看護学分野准教授	新型コロナウイルス感染症流行下における看護師の専門職倫理性とその葛藤
	新規	鷲見 尚己	基盤看護学分野准教授	当事者の経験評価に基づく外来在宅療養生活支援モデルの臨床的有用性
	新規	蝦名 康彦	創成看護学分野教授	ネットワーク分析による産後うつ病の精神病理の解明と個別化した支援の探求
	新規	結城 美智子	基盤看護学分野教授	軽症脳卒中患者の病的疲労に着目したフレイル予防・改善のためのケアプログラム開発
	新規	境 信哉	リハビリテーション科学分野教授	心拍変動バイオフィードバックが心理・認知機能と脳活動に与える影響
	新規	伊達 広行	医用生体理工学分野教授	高水素濃度下でX線被ばくが及ぼす生物学的影響の検証
	継続	矢野 理香	基盤看護学分野教授	高齢者における安全で、気持ちよさをもたらす清拭ケアプログラムの開発
	継続	齋藤 健	健康科学分野名誉教授	母の栄養環境が誘導する仔のエピジェネティックな代謝変化の機構解明と制御
	継続	宮島 直子	基盤看護学分野准教授	Web版対人スキル小集団訓練の持続可能な提供システムの構築
	継続	佐藤 三穂	基盤看護学分野講師	高齢糖尿病患者の足の柔軟性に働きかける足浴プログラムの効果検証
	継続	吉田 一生	リハビリテーション科学分野講師	外傷性脳損傷患者のメタ認知を測定する行動課題の作成と臨床的有用性の検討
	継続	芳賀 早苗	生体応答制御医学分野特任講師	細胞内Ca ²⁺ と活性酸素が誘導するプログラム細胞死による肝虚血再灌流傷害の新展開
	継続	堤 香織	医用生体理工学分野助教	ポリリン酸がミトコンドリア活性を調節して放射線感受性を制御するメカニズムの解明
	継続	千葉 仁志	特別招へい教授	細胞を酸化ストレスから守るリゾリン脂質の発見
	継続	加藤 千恵次	医用生体理工学分野教授	半導体検出器PETによる心電図同期ダイナミック心筋PET検査の開発
	継続	浅賀 忠義	リハビリテーション科学分野教授	聴覚バイオフィードバックを用いた姿勢バランスの運動学習に関する研究
	継続	恵 淑萍	病態解析学分野教授	糖尿病性腎症発症メカニズムの解明と制御:コレステリルエステル蓄積からのアプローチ
	継続	小笠原 克彦	健康科学分野教授	NDBからの糖尿病生活習慣改善因子の因果関係の可視化と医療費シミュレーション
	継続	山本 徹	医用生体理工学分野特任教授	神経細胞賦活を直接観る4次元fMRI法の開発
継続	大槻 美佳	基盤看護学分野准教授	言語理解の脳内機構	
継続	鷲見 尚己	基盤看護学分野准教授	子どもが創る健康指標を活用したがん予防教育プログラムの開発とアクションリサーチ	

研究種目	新規/継続	氏名	分野・職名	研究課題
	継続	寒川 美奈	リハビリテーション科学分野 准教授	寒冷環境における筋腱伸張性に着目した至適ウォームアップ方法の確立
	継続	青柳 道子	創成看護学分野 講師	終末期がん患者の望む生き方を支える看護師の対話力獲得モデルと尺度の開発
	継続	澤村 大輔	リハビリテーション科学分野 講師	もやもや病患者における前頭葉機能低下に対する認知機能トレーニングの確立
挑戦的研究(開拓)	継続	尾崎 倫孝	基盤看護学分野 教授	ランタニド・ナノ粒子(LNP)を利用した癌細胞特異的光治療法の開発
挑戦的研究(萌芽)	新規	前島 洋	リハビリテーション科学分野 教授	エビジェネティクスが支える脳卒中再生リハビリテーションの探求
若手研究	新規	佐井 旭	健康科学分野 学術研究員	インドネシア都市スラムのごみ収集人の自尊心形成におけるCOVID-19の影響
	新規	陳 震	健康科学分野 講師	Study on anti-AD functional marine phytosterols and their sources in dietary seaweeds
	新規	Bomme Gowda Siddabasave Gowda	健康科学分野 講師	Exploring the functional role of Hijiki in obesity-associated to sphingolipid metabolism
	継続	何 欣蓉	食品機能解析・保健栄養学分野 特任講師	ビタミンKによる腎脂肪毒性の改善作用と作用機構の解明
	継続	石田 知也	リハビリテーション科学分野 助教	足圧中心位置に着目した膝前十字靭帯再建術後の代償的運動制御メカニズムの解明
	継続	長谷川 直哉	リハビリテーション科学分野 助教	パーキンソン病患者のすくみ足に対する新たな感覚フィードバック練習の考案
	継続	高倉 祐樹	高次脳機能創発機能分野 特任助教	ウェアラブル端末を用いた認知症の早期発見と類型化に有用となる指標の探索
	継続	加賀 早苗	病態解析学分野 准教授	心エコー法による左心不全患者の右室後負荷の包括的評価法の確立
	継続	千見寺 貴子	リハビリテーション科学分野 准教授	細胞老化システムから解明する手根管症候群の病態メカニズムと新規治療法の開拓
	継続	益田 紗季子	病態解析学分野 講師	ANCA関連血管炎における好中球細胞外トラップのDNase抵抗性獲得機序の解明
	継続	大久保 寅彦	病態解析学分野 講師	病院汚水中薬剤耐性菌の実態解明:汚水は薬剤耐性菌の拡散経路となっているのか?
	継続	櫻井 俊宏	病態解析学分野 講師	酸化HDLに焦点を当てたNASHの発症機序の解明と診断マーカーの探索
	継続	高島 理沙	リハビリテーション科学分野 講師	地域高齢者における作業ストーリーメイキングを活用したアプローチモデルの開発
	継続	陳 震	健康科学分野 講師	Studies on the association of lipid hydroperoxides and Alzheimer's disease by LC/MS
	継続	吉村 高明	健康科学分野 助教	非侵襲的に前立腺癌と正常組織を識別するMRI画像を用いた放射線治療計画技術の開発
	継続	中村 真弥	創成看護学分野 助教	客観的評価を可能とする、授乳に伴う乳頭損傷評価ツールの開発
	継続	大西 竜太	創成看護学分野 助教	超スマート社会で活用できるデジタルネイティブ世代の育児への向き合い方尺度の開発
	継続	宮島 真貴	リハビリテーション科学分野 助教	成人期自閉スペクトラム症に対する認知機能改善療法とリハビリ支援プログラムの効果
	継続	越野 裕太	客員研究員	慢性足関節不安定症に対する股関節機能に焦点を当てたリハビリテーションの効果検証
	特別研究員奨励費	継続	齋藤 健	健康科学分野 特任教授
継続		前島 洋	リハビリテーション科学分野 教授	薬理的ニューロモジュレーションを伴う運動療法が脳卒中後の中枢神経系に与える影響
国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化(B))	継続	山内 太郎	健康科学分野 教授	トイレを必要とする条件とは:狩猟採集民、農耕民、都市生活者の排泄と衛生条件の比較
ひらめき★ときめき サイエンス	継続	山口 博之	病態解析学分野 教授	☆ようこそ不思議な細菌の世界2021☆身の周りの細菌を増やして見て感じてみよう!
二国間交流事業共同 研究・セミナー	継続	池田 敦子	健康科学分野 教授	新しい環境化学物質の複合曝露と子どものアレルギー
環境研究総合推進費	継続	池田 敦子	健康科学分野 教授	環境化学物質の複合曝露による思春期の健康影響評価と曝露源の検討





受賞状況(令和3年3月~令和3年10月)

所属・氏名	受賞・表彰名称等	受賞論文名・研究題目・受賞理由等
健康科学分野 学術研究員 渡辺隼人 2020.11.16	第35回日本生体磁気学会大会 若手研究者(U-35)奨励賞	右前頭領域におけるコミュニケーション関連脳活動
修士課程1年 保健科学コース・健康科学科目群 上田 龍一郎 2021.3.20	日本医療情報学会第2回北海道支部オンライン学術大会 若手研究奨励賞	
修士課程2年 保健科学コース・健康科学科目群 曹 瀛丹 2021.3.20	日本医療情報学会第2回北海道支部オンライン学術大会 若手研究奨励賞	
博士後期課程1年 看護学コース・看護科学科目群 紺谷一生 2021.4.22	24th East Asian Forum of Nursing Scholars Conference BEST ORAL PRESENTER	
修士課程2年 保健科学コース・生体情報科学科目群 井田晴日 2021.5.6	XXXIV International Symposium on Technical Innovations in Laboratory HematologyJ (ISLH 2021 Virtual) ISLH Trainee abstract award	Semi-quantitative scoring of myeloperoxidase-stain positivity using deep learning
修士課程2年 保健科学コース・生体情報科学科目群 井田晴日 2021.5.6	XXXIV International Symposium on Technical Innovations in Laboratory HematologyJ (ISLH 2021 Virtual) ISLH Young Investigator award	Automatic classification of bone marrow blood cell images using a two-stage deep learning system with automatic segmentation and semi-supervised learning.
リハビリテーション科学分野 講師 澤村大輔 2021.5.18	ISMRR & SMRT Annual Meeting & Exhibition 2021 (国際磁気共鳴医学会2021) Magna Cum Laude Award	Cognitive training-derived microstructural and functional neuroplasticity and the neural mechanisms underlying the far-transfer effect.
博士後期課程3年 看護学コース・看護科学科目群 吉村舞 2021.8.28	2020年度一般社団法人日本 看護研究学会北海道地方会	患者の視点で行う退院支援の質評価尺度に関する 文献検討 - 海外で開発された三つの尺度を用 いて -
健康科学分野 教授 小笠原克彦 2021.4.25	公益社団法人日本放射線技 術学会北海道支部学術賞	
修士課程2年 保健科学コース・生体情報科学科目群 青木菜摘 2021.9.4	第55回日本臨床検査医学会 北海道支部総会学会賞	ビタミンKの腎臓近位尿管細胞におけるミトコ ンドリア保護作用に関する研究
修士課程2年 保健科学コース・健康科学科目群 吳亦柔 2021.9.4	第55回日本臨床検査医学会 北海道支部総会学会賞	Mitochondrial protective effect of DHMBA under oxidative stress in HK-2 proximal tubule cells
保健学科4年 検査技術科学専攻 竹下花 2021.9.4	第55回日本臨床検査医学会 北海道支部総会学会賞	サケ白子抽出物のミトコンドリア形態への影響
修士課程1年 保健科学コース・生体情報科学科目群 井上夏緒 2021.9.4	第55回日本臨床検査医学会 北海道支部総会学会賞	AutoDockによるリゾホスファチジルエタノール アミンとアルブミンとの結合予測
修士課程2年 保健科学コース・生体情報科学科目群 大場早紀 2021.9.4	第55回日本臨床検査医学会 北海道支部総会学会賞	Selected Allium vegetable extracts targeting lipid droplet accumulation in HepG2 cells loaded with free fatty acids
修士課程1年 保健科学コース・生体情報科学科目群 佐崎生 2021.9.4	第55回日本臨床検査医学会 北海道支部総会学会賞	酸化LDLの肝脂質代謝への影響
修士課程2年 保健科学コース・生体情報科学科目群 青木菜摘 2021.9.4	第31回日本臨床化会北海道 支部例会 若手優秀演題賞	ビタミンKの腎臓近位尿管細胞におけるミトコ ンドリア保護作用に関する研究
博士後期課程3年 保健科学コース・総合健康科学科目群 Shan Yun 2021.9.18	The 5th FHS International Conference	Factors Predicting Occupational Dysfunction in Community-Dwelling Older Adults.
博士後期課程1年 保健科学コース・総合健康科学科目群 Yi Zeng 2021.9.18	The 5th FHS International Conference	Associations Between Hygiene Practices and Fecal Contamination in the Household Environment of Children in a Suburban Area of China.
修士課程2年 保健科学コース・健康科学科目群 上田龍一郎 2021.9.18	The 5th FHS International Conference	COVID-19 and Public Opinion: A Sentiment Analysis of Twitter Users in Japan.



人事異動(令和3年3月~令和3年10月)

●令和3年3月1日

(採用) 仲本 宗泰 医用生体理工学分野助教
陳 一凡 病態解析学分野助教

●令和3年3月31日

(退職) 齋藤 健 健康科学分野特任教授
安積 陽子 創成看護学分野准教授
吉田 祐子 基盤看護学分野助教
平山 憲吾 基盤看護学分野助教
山品 博子 医用生体理工学分野助教
唐 明輝 研究院長付(医用生体理工学分野)助教

●令和3年4月1日

(採用) 田高 悦子 創成看護学分野教授
池田 敦子 健康科学分野教授
穴戸 穂 基盤看護学分野助教
山崎尚二郎 データヘルスイノベーション分野特任助教

(昇任) 千見寺貴子 リハビリテーション科学分野教授
高島 理沙 リハビリテーション科学分野講師

(契約期間更新)

Dibwe Dya Fita Eddy 研究院長付(病態解析学分野)助教

●令和3年7月12日

(退職) POUDEL KRITIKA 健康イノベーションセンターOne-Health推進部門特任助教

●令和3年10月1日

(採用) 大橋 和貴 基盤看護学分野助教



広報誌の名称 「プラテュス」の由来

保健科学研究院の玄関前には、大きな二本のプラタナスの樹があります。古代ギリシャの医者ヒポクラテスは、プラタナスの木陰で弟子たちに医学を説いたそうです。大きな広い葉をもつプラタナスは、ギリシャ語で「広い」を意味する platys(プラテュス、ギリシャ語では「πλατύς」と記す)に、その名が由来するとされています。本研究院が幅広い分野の専門家の集まりであることから、このプラタナスの語源になぞらえて「プラテュス」と命名しました。

【発行】 北海道大学大学院保健科学研究院広報室

〒060-0812 札幌市北区北12条西5丁目

【連絡先】 医学系事務部保健科学研究院事務課庶務担当

電話 011-706-3315 / E-mail shomu@hs.hokudai.ac.jp

URL <https://www.hs.hokudai.ac.jp>